

ポストモダンにおける学生の成長モデルと時間的展望獲得に関する研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐久田, 祐子, 奥田, 亮, 川上, 正浩, 坂田, 浩之 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4351

ポストモダンにおける学生の成長モデルと時間的展望獲得に関する研究

学芸学部 心理学科 佐久田祐子 学芸学部 心理学科 奥田 亮
学芸学部 心理学科 川上 正浩 学芸学部 心理学科 坂田 浩之

要旨：本研究では、ポストモダン状況に生きる学生たちが4年間でどのように変化・成長するのか、そのパターンやモデルを明らかにすることを目的として、縦断的なインタビュー調査を実施した。その結果をもとに、まず研究1では1年次～2年次春において、これからの大学生活に対する漠然としたビジョン・卒業後の不安・具体的な目標について調査でどの程度言及しているか、という点から、変容パターン（成長モデル）として3つの群を抽出した。研究2では、3つの群が4年次冬のインタビュー調査で「大学生活で一番楽しみにしていたこと」についてどのように回答したかを分析し、研究1と併せてその特徴から3群を「日常享楽群」「日常学業充実群」「不安切迫群」と命名した。研究3では、3群から代表的と思われる事例を抽出し、それぞれの成長過程を具体的に記述した上で、成長と不安の関係の観点から考察を行った。

キーワード：ポストモダン、大学生、成長モデル、時間的展望獲得

問題と目的

経済を中心とするグローバル化や少子高齢化、情報化といった急激な社会の変化の中、労働市場や産業・就業構造の流動化などによって将来予測が困難になっている今の時代（文部科学省，2012）が、「ポストモダン（postmodernity）」、あるいは「後期近代（latemodernity）」と呼ばれて久しい。ポストモダンとは、社会全体に作用する統一的な世界観であり、普遍的な価値の物語である「大きな物語」がその信憑性を喪失している事態のことである（Lyotard, 1979 小林訳 1989；本柳，2006）。日本においては、70年代後半以降の高度消費社会になると、「大きな物語」が信憑性を失い始め、局域的に展開される無数の「小さな物語」が社会全体を覆っていった（本柳，2006）。

近年、大学教育（学士課程教育）において、アクティブ・ラーニングによって学士力を習得させ、学生達のキャリア発達の促進を目指す教育が開発・展開されてきている。2006年に経済産業省が「社会人基礎力」を提唱し、2008年に発表された中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」において「学士力」という考え方が示されたように、日本の高等教育はグローバル化する知識基盤社会に対応した能力の育成をその課題としている（成田，2014）。これらは、フリーターや非正規雇用の若者の増加や、早期離職といった社会問

題を背景として、職業や職場、社会的役割が変わっても、適応的な社会参加を継続できるジェネリックスキルズを習得させるための教育であると言える。すなわち、変化の激しい現代社会では、定型的な仕事を的確にこなす力よりも変化に柔軟に対応する力が必要（成田，2014）だとされている。しかしながら、一方ではこれらのアプローチは、大きな物語を喪失し、価値観が多様化した予測困難なポストモダン状況を生きる現在の大学生に対して、時間的展望を与える「大人になる」「成長する」イメージを扱うことなしに、「どんな環境においても『答えのない問題』に最善解を導くことができる能力」（文部科学省，2012，pp.1）を身につけさせようとするものだと言えることもできる。

ポストモダンにおける社会、経済、文化の急速な変化は、アイデンティティの多重性、流動性、ハイブリッド性、混合を生みだし、若者のアイデンティティ形成にも影響する（Rattansi & Phoenix, 2005）。そして、アイデンティティ形成への影響は、アイデンティティ形成と密接に関わる時間的展望（溝上・中間・畑野，2016；都筑，1993）への影響につながる。溝上（2004）によれば、1960年代～1980年代の日本の青年には、自分のやりたいことや将来の目標から出発して人生を形成するのではなく、より高い社会階層（取

入や社会的地位など)に属する大人社会に参入することを基本的な価値基準とした上で、そこに至る過程でできるだけ自分に合っているもの、少しでもやりたいと思えるものを選び人生を形成していくという生き方のダイナミクス(これを溝上(2004)は「アウトサイド・イン」と呼ぶ)が見られた。それが1990年代以降では、バブル経済の崩壊、就職状況の悪化、年功序列・終身雇用制度の崩壊などにより大人社会の権威が失墜し、アウトサイド・インによる将来・人生の保障が得にくいものとなったことに伴い、青年は、まず自分の内面からやりたいこと、生きがい、将来の目標を定め(つまり「自分探し」をして)、それを実現できる職業世界に出ていこうとする生き方(これを溝上(2004)は「インサイド・アウト」と呼ぶ)を採るようになった(溝上, 2004)。しかし、「大きな物語」が終焉したポストモダン社会では、自らが「小さな物語」を創出し、自分自身が納得できる形へ「自己物語」を再構築することが再帰的に絶えず求められる重荷をもたらす(本柳, 2006)、インサイド・アウトの生き方は、自分探しの深みにはまり込んで出られなくなるという危険性を多分に孕んでいる(溝上, 2004)。また、時間的展望に関して言えば、2010年代の大学生にとって、5年後・10年後もこれだけは確実に存在するものを想定することは難しく、過去・現在・未来という時間は、連続し一貫した単一のものではなく、多様な過去・現在・未来の中のいくつかの可能性として立ち現れるという、多元化の様相を呈するものになっている(奥田, 2013)。こうした現況において、現在の大学生の成長と時間的展望獲得の実際を正しく把握することは、予測困難な時代を生き抜かなければならない若者や学生の力を具体的に伸ばすために今こそ行動することが必要な大学や教員、社会(文部科学省, 2012)にとって有益なことである。そしてこうした知見を大学生自身が役立てるためには、これを具体的なモデルとして提示することが有効であると考えられる。

近年、現在の学生の大学生活の過ごし方やアイデンティティを明らかにしようとする試みは見られている(高坂(2016)、溝上(2009)など)。しかし、これらは実際に現在の学生たちが4年間でどのように変化・成長するのか、その変化・成長にどういったパターンやモデルがあるのかを縦断的に明らかにしたものではない。そこで、本研究では、実際に現在の学生たちが4年間でどのように変化・成長するのか、その変化・成長にどういったパターンやモデルがあるのかを明ら

かにすることを目的とする。具体的には、1) 大学生が4年間の学生生活の中でどのように成長するのか、その実際を記録し、2) その記録を分析し、いくつかの変容パターン(成長モデル)を抽出する。本研究により、現在の大学生の成長モデルが明らかにされれば、近年展開されている、アクティブ・ラーニングによって学士力を習得させ、キャリア発達を促すというアプローチとは異なる、可能性としてはその先の、現在の大学生の成長を効果的に支援する大学教育のあり方を示すことができるであろう。

研究1

大学生が学生生活の中でどのように成長するのか、その実際を入学時から卒業時にかけて縦断的に記録し分析することにより、いくつかの変容パターン(成長モデル)を抽出することを目的とする。研究1では、大学入学から2年次春にかけての変容パターンを提示する。

方法

調査対象者 調査の趣旨に同意した奈良県内O女子大学に所属する大学生28名(第1回調査時点での平均年齢18.14, $SD = .76$)を対象とした。

実施時期 2011年4月から2015年3月にかけて調査を実施した。なお研究1では、1年次入学時(2011年4月)、1年次秋(同11月)、および2年次春(2012年5月)のデータのみを分析対象とした。

調査内容 調査対象者に対し、上記調査時期の3時点、Table 1のような大学生活の実際と現在の思いに関する質問について一問一答形式で回答を求めるインタビューを行い、それをデジタルビデオで記録した。

次に、その映像記録を元に、インタビュー内容をテキストに書き起こし分析を行った。その際、①不安に対する回答(Q3)に、進路や就職といった長いスパンの不安が言及されるか、②これからどのように過ごしたいかという問いに対する回答(Q1)に、「楽しく過ごしたい」といった、漠然としたビジョンが述べられるか、具体的な目標に言及されるかの2点に注目した。

Table 1. インタビューの質問項目

Q1. これからの大学生活を、どのように過ごしたいと思っていますか?
Q2. 大学生活で、あなたが一番楽しみにしていることは何ですか?
Q3. 大学生活で、あなたが一番不安に思っていることは何ですか?
Q4. 心理学とはどういう学問だと思いますか?
Q5. あなたの将来の夢を教えてください。
Q6. 「今の自分」をひとことで表現すると…? (その理由は?)

倫理的配慮 インタビュー調査に際しては、研究協力者募集の時に、本研究の目的と、縦断的な研究を行うことを文書で説明し、同意の得られた者のみを対象とした。また、毎回のインタビュー開始時に、インタビューの目的を改めて説明し、ビデオカメラによる録画の許可を得た。なお、映像データからの書き起こしに際して、個人を識別できる情報を匿名化し、個人情報保護に配慮した。

結果と考察

インタビュー内容を書き起こし分析対象とした。本研究ではこれからの過ごし方についての問い (Q1) に対して、「楽しく過ごしたい」「充実させたい」といった漠然としたビジョンを述べるか、具体的な目標に言及するか、不安 (Q3) に対して、進路や就職といった長いスパンの不安 (卒業後不安) に言及するか、以上3点に注目した。調査3時点における不安の言及回数を縦軸、漠然としたビジョンの言及回数を横軸とするマトリックスを作成し、調査時点ごとの目標の具体性を5段階 (「具体的」「やや漠然」「迷い中」「漠然」「未定」) で評価し、これを数字の5から1で示した (1が未定、5が具体的) ものがTable 2である。なお、目標の具体性については、調査者4名がインタビュー内容を協議し分類を行った。

Table 2. 1年～2年次春の卒業後不安・漠然としたビジョンの言及回数および目標の具体性

	漠然としたビジョン0回	漠然としたビジョン1回	漠然としたビジョン2・3回
卒業後不安述べられず	A 5 4 2 B 5 5 5	G 5 1 5	N 3 3 3 O 2 5 5 P 5 5 3 Q 5 5 5 R 5 5 3 S 5 1 5
	C 2 5 5 D 2 2 5 E 1 3 5 F 2 2 5	H 1 5 1 I 4 2 4 J 5 5 5 K 1 3 1 L 2 2 5	T 1 2 1 U 5 1 1 V 5 5 2 W 1 2 2 X 5 5 1 Y 5 2 2 Z 1 1 1 a 5 5 2
3回とも卒業後不安		M 5 5 5	b 5 1 5

注) 5: 具体的, 4: 具体～やや漠然, 3: 迷い中, 2: 漠然, 1: 未定

Q1において、3回の調査のうち2時点あるいは3時点で、大学生活を「楽しく過ごしたい」と漠然としたビジョンを述べた者は15名であった。このうちQ3において卒業後の不安に一貫して言及しなかった者は

6名 (Table 2におけるN、O、P、Q、R、S)、毎回ではないものの言及する者は8名 (T、U、V、W、X、Y、Z、a) であった。各群の該当人数から、本研究においては後者 (8名) がメジャー群であり、前者 (6名) を対極群1と位置づけることができる。

メジャー群と対極群1について将来の目標の具体性を比較すると、対極群1はいずれの調査時点においても目標は具体的であるケースが多く、一方のメジャー群では具体的であった目標が時間と共に漠然としていくような傾向が読み取れる。メジャー群において、2年次秋の調査時点で将来の目標が具体的であった者は一人もいなかった。

次にQ3において、3回の調査のすべての時点で不安に言及した者は2名であった。この2名はQ1において、1時点あるいは3時点で「楽しく過ごしたい」と漠然としたビジョンを述べており、卒業後の不安を感じながらも漠然とした目標と現状のとらえ方をしていくことがうかがえた。Q3において最も多かったのは、入学当初は卒業後不安への言及がないが徐々にこうした不安に言及する者 (17名) であった。その中には、漠然と「楽しく」日常を過ごしながら、入学当初は具体的であった将来の目標が2年次までに漠然としたものへと変化するメジャー群 (8名) が含まれるが、どの時点においても「楽しく」「充実した」といった漠然とした学生生活像に言及することのない、メジャー群とは対照的な4名 (C、D、E、F) が見出された。この群を対極群2とする。

対極群2の特徴は、メジャー群および対極群1とは異なり、入学当初は目標が漠然としているものの、2年次までに具体化する点である。

以上から、一定の長期的な将来に関する時間的展望に基づくと考えられる不安をほとんど持たない、あるいは不安を過剰に抱えていることが、「終わりなき日常」 (宮台, 1995) としての大学生活に楽しみを求める態度につながるということが示唆された。前者は将来に対する自覚のなさや輝かしい将来の見えない現実に対する適応、後者は不安に対する逃避的態度が示されていることが考えられる。また適度な時間的展望とそれに伴う不安が、具体的な目標の意識につながるということが考えられる。ただし、大学生生活の進行に伴い将来への不安が高まる場合でも、目標を考え始める者とそうでない者がおり、後者は身近な現実である交友関係に不安を抱いているため、まず日常の「楽しく」を優先している可能性がある。あるいは、自分のまわりに漂う慢性的な空虚感を取り払うために、一生懸命楽しもう

としている（香山, 2002）可能性もある。

本研究で得られた大学1年次から2年次春の成長プロセスに関する仮説は、4年間を通じての成長を追うことで検証される必要がある。

研究2

本研究では、研究1に続き、メジャー群（大学に入学して1年間過ごす中で、将来への不安が生じてくるが学生生活は「楽しく充実して」過ごしたい、と述べる。夢は漠然化・未定になる傾向）、対極群1（入学後1年間過ごす中で不安なこととして、将来のことが語られない。学生生活は「楽しく充実して」過ごしたい、と述べる。夢は全体的に具体的）、対極群2（大学に入学して1年間過ごす中で、将来への不安が生じてくる。大学生生活の過ごし方について「楽しく充実して」といった表現はしない。夢は具体化している）の3群の大学生が、卒業時にどのような特徴を示すのか、卒業間際である4年次冬（2月）にインタビューを行い、回答された内容を分析する。

方法

調査対象者 研究1の対象である本学心理学部大学生28名のうち、研究1の結果において、上述の3群に分類された大学生18名を分析の対象とした。

実施時期 インタビューは4年次冬（2015年2月）に行われた。

調査内容 調査対象者に対し、大学生生活の実際と現在の思いに関する質問について一問一答形式で回答を求めるインタビューを行い、その様子をデジタルビデオで記録した。このインタビューに対する回答のうち、「大学生生活であなたが一番楽しみにしていたことは何ですか」という問いに対する回答を分析した。

結果と考察

研究1の結果、メジャー群として8名、対極群1として6名、対極群2として4名の大学生が抽出されている。各群の大学生において、卒業間際の「大学生生活で楽しみにしていたこと」に対する回答を分析の対象とした。この回答について、テキストデータに書き起こしたうえで、「心理学や授業等、学業に関わること（学業）」に言及されるか、「友人等、交友に関わること（交友）」に言及されるかに注目した。筆者らで協議のうえ、回答内容を学業、交友、その他（学業、交友両方への言及含む）のいずれかに分類し、3群それぞれでその人数をカウントした（Table 3）。人数が十分に多くないため統計的な検定は行わないが、メジャー群では交友への言及、対極群1では学業への言及

Table 3. 3群の「大学生生活で楽しみにしていたこと」

	日常享楽群 (メジャー群)	日常学業 充実群 (対極群1)	不安切迫群 (対極群2)	計
学業への言及	1	4	2	7
交友への言及	4	0	1	5
その他	3	2	1	6
計	8	6	4	18

が多い傾向が見て取れる。すなわち、概ね大学生生活を「楽しく」過ごしたいと感じているポストモダンを生きる現代の大学生（メジャー群）にとっては、大学生生活の楽しみは交友関係そのものであること、一方で、将来に対する不安がなく、大学生生活を「楽しく」過ごしたいと感じる大学生（対極群1）は、大学を学びの場であると捉え、専門の授業・内容が学べることを楽しみとして大学生生活を送っていることが示唆された。

これらの結果から、メジャー群を「日常享楽群」、対極群1を「日常学業充実群」、対極群2を「不安切迫群」と命名した。

研究3

本研究では、研究1・2で見出された3つの群から代表的と思われる事例を抽出し、ポストモダンの大学生における変容パターン（成長モデル）を、4年間にわたるその成長過程を記述した事例を通じてより具体的に描き出すこと、成長と不安の関係の観点から再考することを目的とする。

方法

事例研究対象者 心理学を専攻する女子大学生3名。日常享楽群、日常学業充実群、不安切迫群それぞれに分類された中から典型的な1名を選んだ（事例T, N, D）。

結果と考察

それぞれの事例の成長過程とその特徴について、以下に報告する。

<日常享楽群：事例T>

入学当初：大学生生活を「とりあえず楽しく過ごせたらいいと思っています」と述べつつも、楽しみにしていることは「特にありません」、将来についても「まだ夢とか、あまりありません」という。自分は「中途半端」「雑」であり、「卒業できるか心配」と語った。

1年次秋：将来の夢は「ない（笑いながら）」「とりあえず公務員とか、そっち系に行きたい」、「就活できるか、卒業できるか」不安というが、大学生生活は入学時と変わらず「とりあえず楽しく過ごしたい」と

語る。自分を表現する言葉も「雑」と変わりなかった。

2年次春：「とりあえずのんびり平穏に過ごしたい」が「とりあえず卒業と就職が」不安であり、将来の夢は「特にない」、今の楽しみは「なんやる…友達と話すことかな」、そして今の自分は、やはり「雑」である、と表現された。

4年次：4年次も「とりあえず悔いなく」過ごすことを望み、秋には将来の夢は「ない」ものの「とりあえず仕事、いまバリバリ働きたい」「卒論と就活ができるか」が心配だという。卒業時には「就職できてよかった」と語った。自己像は4年次でも「雑」の一言のままであり、また4年間学んだ心理学について「色々なことやるなあっていう学問」と回答する等、学びのイメージも漠然としたままであった。

4年間を通じて：「とりあえず」が口癖で、将来の夢は「特にない」と述べるのが多かった。自分自身を表現する言葉として挙げられたのは4年間変わらず「雑」の一言であり、自己イメージの変容や成長感を表現する様子はほとんど見受けられなかった。このように、長期的な展望を持つことが少ない、あるいは将来的な不安を漠然と抱いても、具体的・計画的にそれに対処する姿勢に乏しいことや、学生生活の過ごし方について深く思考せず、目前の楽しみ（交友関係など）や課題に関わるという傾向が、本事例から窺えた。

<日常学業充実群：事例N>

入学当初：どのような大学生活を過ごしたいか、の問いに、大学生活を「有意義に過ごしたい」と述べた。楽しみにしていることは「心理学を学ぶこと」と「友達と一緒にご飯を食べたり」することであるが、一方で、「勉強について行けるかも不安」「友達関係もうまくいかが心配」とも語っており、学業と交友関係に関心が向けられていることが窺えた。今の自分については、「未熟」「まだまだ、甘い部分もある」という。

1年次秋：大学生活は「楽しく、勉強もしっかりしながら友達と仲良くしていきたい」、「ゼミに入って、友達とか先生とかと一緒に勉強すること」が楽しみであり、「勉強にちゃんとしていけるか」と「友達と仲良くうまくできてるか」等が「ちょっと不安」という。自らは「成長中」と表現し、「未熟な部分」があるため「これから成長していきたい」と述べた。

2年次：1年次と同様に、大学生活を「楽しく、勉強もしっかりしながら、友達と仲良くしていきたい」

と語り、やはり「勉強についていけるか、友達と仲良く過ごしていけるか」の2つが不安として挙げられていた。自らは「発展途上」であり、「まだまだ頑張るところがある」という。

卒業前：大学生活を振り返ると「すごく充実して、きっと一生の中でもこんなに自由で楽しい時間は絶対ないと思うから、すごく大切な時間」であった、と語った。「勉強も楽しみにしてたんですけど、友達とも一緒に遊んだりとかが結構楽しみでした」と振り返り、学業と日常的な交友関係の双方の充実で満足感をおぼえていることが窺われる。4年間を通じて自分が「成長した、かな」「考え方が高校の頃、入学したての頃より変わってきた」と、手応えを感じているようであった。

4年間を通じて：事例Nの学生にとって、学業（心理学を学ぶこと）と交友関係の2つが学生生活の中で大きな関心事であり、日常の楽しみも不安もその2点に関するものであった。入学当初から2年次までは、自分が「未熟」「発展途上」であると自覚しつつ、それに由来するような不安を訴えるのではなく、成長したいという意欲について述べている。このように自らがエネルギーを注ぐターゲットや課題について比較的ストレートに表現し、取り組む姿勢を表明した結果として、4年次には自己の成長を実感し、かつ4年間の大学生活を充実したものとして振り返ることができたと考えられる。

<不安切迫群：事例D>

入学当初：大学生活を「友達もいっぱい作って、学科の勉強もしたい」と意欲的だが、大学生活の一番の楽しみに関しては、「まず友達を作ること」という。「時間割とか自分で組んだりするので、スケジュールが組めるかどうか心配」で、まだ「自立とかできてないと思う」自分のことを「成長途中」だと表現した。

1年次：「友達と過ごすことが楽しい」「勉強だけでなく、今も友達いっぱいいるんですけど、もっと他の人とも、話したりしたい」と交友関係の充実と拡大に気持ちが向いている。一方「朝起きる」のが苦手で生活が「ちょっとたるんでるかなと思う」ため、今の自分は「中途半端」だと語る。将来に対しては「資格を取ってそれを活かした就職」と述べるものの、資格の具体的な内容や将来への展望ははっきりしないまま、楽観的に捉えている。

2年次：大学生活での楽しみは、1年次に引き続き「毎日友達とお弁当食べたりとかそういう時間」とい

った交友関係についてであるが、「心理学で資格とかあんまり考えてないんで、これからどうしようかなってというのがちょっと不安」という。「商品開発とかに興味ある」ので、その方向に進みたい、「インターンシップとかも夏行くことにしてるんで、自分のためになるようなことを色々していきたい」と、将来の目標やそれに向けて取り組む姿勢が急速に高まりつつも「やることとかすごい多くて」「あんま寝る時間がない」ため、今の自分は「寝不足」だと語り、充実感と共に焦燥感も感じられる発言が見受けられた。

4年次：将来について「人並みに楽しく生きれたらいい」「安定した生活ができるようになったらいいなと思います」と、ゆるやかな目標に修正された。しかし相変わらず4年次の春でも自分が「追われている」と感じ、4年次の秋に大学生活を振り返る中で「やりたいことがたくさん見つけられたり、目標とか友達の大事さに気づくことができた」という充実感と併せて、「(大学生活は)4年間しかない」という時間の短さを何度か述べている。「大学から社会に出ていくので」今の自分は「前進」という状態である、と語った。

4年間を通じて：交友関係を大学生活の楽しみとしつつ、2年次頃から将来に対する不安と目標について口にし始めている。現在の学業やそれに関連する資格の力でなく、自分の力で社会に出なければならないことを意識しており、将来を積極的に考える姿勢と同時に、焦りや切迫感も垣間見え、今現在の学業や自分自身についての満足・成長の実感が語られることは少なかった。

総合考察

本研究は、ポストモダンを生きる女子大学生の成長モデルを、1年次から4年次まで継続的に実施した、一問一答インタビューの分析から明らかにしようとする試みである。4年間の継続的な調査であるので、研究期間を通しての参加者の確保を行うことが困難であり、本研究においても、入学生の半数以下のデータを収集することしかできなかった。さらに、その中で典型例をピックアップしていくと、分析の対象となる人数が少なくなってしまうことが問題である。しかしながら、学生たちは、様々なタイプの成長の仕方を垣間見せ、今回の研究では少なくとも3つのタイプの成長のプロセスをたどる学生たちが、一群存在することを示すことができた。そして、これらの3つのタイプの学生たちの語りを分析していくと、それぞれのタイ

プがかなり異なっていることが感じられる一方で、学生の語りには、共通して、「真なる物語を構成する関係の諸要素—すなわち偉大な主人公、重大な危難、華々しい巡歴、崇高な目標—」(Lyotard, 1979 小林訳 1989, pp. 9)を失っているというポストモダン状況が現れていると考えることもできる。

現在におけるアイデンティティ形成は、過去に比べて延長され、個人化されたが、ポストモダニストが主張するようには破断されていないことを支持する知見もある(Roberts & Côté, 2014)。それでもなお大学生は、青年期の中でも特にアイデンティティの確立が発達課題となっている時期である(吉川・栗村, 2013)。大学生の時代にどのように成長するかは、プロダクトであると同時にプロセスであり、さらに先の時代の成長やさらなるアイデンティティ形成を支える基盤となる。

今後、アイデンティティ形成と大学生の成長過程あるいは成長「意識」や獲得「意識」についてアイデンティティのステータスを測定する尺度等を併用しつつ、量的・質的に分析していくことが必要であると考えられる。

付記

本研究は大阪樟蔭女子大学特別研究助成費の助成を受けた。また、本研究結果の一部は、日本教育心理学会第56回総会(2014年)、第57回総会(2015年)、第60回総会(2018年)において発表された(それぞれ川上・坂田・佐久田・奥田(2014, 2015, 2018))。

引用文献

- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮(2014).
ポストモダンにおける大学生の成長モデルと時間的展望獲得に関する探索的研究(1) 日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 160.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮(2015).
ポストモダンにおける大学生の成長モデルと時間的展望獲得に関する探索的研究(2) 日本教育心理学会第57回総会発表論文集, 549.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮(2018).
ポストモダンにおける大学生の成長モデルと時間的展望獲得に関する探索的研究(4) 3つの成長モデルの4年間にわたる事例研究 日本教育心理学会第60回総会発表論文集, 134.
- 香山リカ(2002). 若者の法則 岩波書店
- 高坂康雅(2016). 大学生活の重点からみた現代青年

- のモラトリアムの様相—「リスク回避型モラトリアム」の概念提起— 発達心理学研究, 27, 221-231.
- Lyotard, J. F. (1979). *La Condition postmoderne: Rapport sur le savoir*, Paris: Minuit.
- (リオタール, J. F. 小林康夫 (訳) (1989). ポスト・モダンの条件—知・社会・言語— 水声社)
- 宮台真司 (1995). 終わりなき日常を生きろ—オウム完全克服マニュアル— 筑摩書房
- 溝上慎一 (2004). 現代大学生論 ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる NHKブックス
- 溝上慎一 (2009). 「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す— 京都大学高等教育研究, 15, 107-118.
- 溝上慎一・中間玲子・畑野快 (2016). 青年期における自己形成活動が時間的展望を介してアイデンティティ形成へ及ぼす影響 発達心理学研究, 27, 148-157.
- 文部科学省 (2012). 予測困難な時代において生涯学習続け、主体的に考える力を育成する大学へ (審議まとめ) Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2012/04/02/1319185_1.pdf (September 15, 2018.)
- 本柳亨 (2006). 消費社会と自己物語—モノログ化する消費— 社会学論集, 8, 25-39.
- 成田秀夫 (2014). エビデンスに基づいた大学教育の再構築に向けて—ジェネリックスキルを含めた学修成果の多元的評価— 情報知識学会誌, 24, 393-403.
- 奥田雄一郎 (2013). 大学生の時間的展望の時代的変遷—若者は未来を描けなくなったのか?— 共愛学園前橋国際大学論集, 13, 1-12.
- Rattansi, A., & Phoenix, A. (2005). Rethinking youth identities: Modernist and postmodernist frameworks. *Identity*, 5, 97-123.
- Roberts, S. E., & Côté, J. E. (2014). The Identity Issues Inventory: Identity stage resolution in the prolonged transition to adulthood. *Journal of Adult Development*, 21, 225-238.
- 都筑学 (1993). 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.
- 吉川満典・栗村昭子 (2013). 大学生におけるアイデンティティの確立について—心理的居場所との関係性から— 総合福祉科学研究, 4, 35-41.

A Study on Students' Growth Models and Temporal Perspective Acquisition in the Postmodern Age.

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology

Yuko SAKUTA

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology

Akira OKUDA

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology

Masahiro KAWAKAMI

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology

Hiroyuki SAKATA

Abstract

In this study, a longitudinal interview survey was conducted with the objective of clarifying patterns and models of how students change and grow in 4 years in the postmodern age. In Study 1, three groups were asked to describe their general vision for university life, their uncertainty about life after graduation, and their specific goals from spring of the 1st year to spring of the 2nd year. This data was extracted as the change pattern (growth model). In Study 2, in the interview during the winter of the 4th year, three groups were analyzed in how they answered the question: "What are you looking forward to the most in college life?" Together with the results of Study 1, the three groups were classified as "The Daily Enjoyment Group", "Academic and Daily Achievement Group", and "Anxiety Impending group". In Study 3, we extracted cases that seemed to be representative from the 3 groups, described each growth process concretely, and analyzed the relationship between growth and anxiety.

Keywords: postmodern, university students, growth model, temporal perspective